

東京バッハ合唱団「月報」

[第501号] 2004年3月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3Web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.501

March 2004

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

ソウルを訪れて

大村 恵美子

2月9,10日の2日間、ソウル神学大学で、「韓・日ボンヘッファー学会 国際学術大会」が開かれ、14名の日本人メンバーと一緒に、私も参加させていただきました。

それに先立って、メンバーのおひとり、南吉衛牧師（信濃町教会。1997年の合唱団ドイツ公演に際しては、ケルンにあって現地受け入れの任に当たってくださった）が、ソウル市内のある教会の聖日礼拝（8日）で説教をなさるとのことで、多くの参加者が礼拝出席からのソウル滞在を希望された。国民の4人に1人がクリスチャンという現在の韓国の教会を、この機会にぜひ知りたいと思い、千人単位の大教会が数ある中で、「ふつうの（規模の）教会」を選んでいただき、教会員数約300人の「香隣教会」に連れて行っていただきました。

2月8日（日曜日、滞在第2日）

礼拝の開会は10時37分と書かれています。まず正面のゆったりしたステージに、開会合図の「どら」とキーボード、日本の雅楽の淵源を思い出させる民族伝統楽器の笛・弦（若い奏者ばかり約10人）、そして、男女ほぼ同数の聖歌隊員約20人。ヨーロッパでも日本でも同じように、どこの教派が音楽が盛んだったり振るわなかったりする、という一般的共通項ではなく、個々の教会によってそれはまちまちのようです。「ふつうの教会」といっても、一般にはやはりオルガンだけの伴奏というスタイルが多く、民俗楽器使用はこの教会だけの特徴のようです。

礼拝は、2冊の讃美歌集から、多くの歌が歌われながら進行しました。大きく分けて、新旧の韓国オリジナルの、哀愁を含んだ流れるような歌（3連符の複合拍子系が多い）、もう一方では、心を鼓舞するような、明かるく素朴な歌（欧米作曲家のものも多い）、と2つの傾向があるようです。それを、聖歌隊員だけでなく、会衆もとても音楽的に歌いつづけるのでした。皆さん洗練され、教養の高い感じで、あらゆる年齢層が含まれています。

日本ボンヘッファー研究会からの訪問者として、私たちが紹介され、浅見一羊さん（解剖学専攻の医師）があいさつをなさって、感動をひき起こしました。

「昨夕、空港からお迎えの車で神学大学のゲストハウスまで運ばれる間、目覚ましい沿道の景観に圧倒されました。そして今朝、地下鉄でこちらに向かいましたが、乗り合わせた皆さん、きっと欧米の人たちから見れば、見分けがつかないのだろうと思われそうですが、私には、とても明かるく、思慮深く、健康な方々ばかりのようなお姿を見て、なんだか涙が出て止まりませんでした。実は、過去にあまり苦しく悲しい思い出があるものですから、この機会に参加することに、内心で大きなためらいがあったのですが、こちらへ来てみて、ああ、私たちは、すばらしい隣人に恵まれていたのだと知り、感謝で一杯です。」このような内容だったと思います。大きな拍手で受け入れられました。

私の胸に深く食いこんだ思いを、これにつけ加えますと、1991年、東欧の変化後、ソ連邦がなくなって多くの国が独立しました。そのドキュメント番組がテレビでたてつづけに紹介されましたが、何万、何十万、何百万という単位で民族が抹殺され、放逐され、生活を奪われ、国を失っていた、その人たちの最初に取り戻したものの多くの中に、固有の文字や習慣、民俗音楽・楽器もあったと紹介されていました。しあわせな昔に、歌い奏でかつ踊った、それらが、長い間にもひそかに隠し保たれ、解放とともにいち早く登場したのです。

いまここに、礼拝の中で、若い奏者たちによって、ふたたび人々に生命を呼び起こしている楽器が、まさにそのような連想に結びつきました。

午後には、1998年11月に開館したという「西大門刑務所歴史館」を見学しました。「わが国の独立のために、日帝の侵略に立ち向かったすえに、亡くなられた愛国烈士を偲び、烈士の自主独立の精神を振り返る、生きた歴史教育の場」、観覧案内の日本語版には、こう記されていました。

石原慎太郎、小泉純一郎も、ぜひ来て学ぶべきである。突きつけられた高校生のイラク派兵反対の署名簿を一瞥だにしないで、「教師は学校でしっかり教育しろ」と暴言を吐く首相たち、偽指導者全員。

かつて、1992年に、私が一人で解放直後のブダペスト、ワルシャワ、プラハを訪れ、外国人向けの観光バスで戦跡をまわったとき、グループ後部に、一かたま

りのドイツ人旅行者がいた。そして言葉もなく、見つ



●会議の会場となったソウル神学大学全景

めるばかりだった。その姿を、今の私たちに重ね合わせていました。

今でも、時代劇、新撰組ものや水戸黄門などのテレビで、「お上」の暴虐やリンチのすさまじさは、日常見られるところです。ヨーロッパでも、多くの市庁舎の地下には、昔からの拷問室、処刑室が残されていて、人類のサディスティックな本性を語り継いでいます。しかし、なぜ隣の国に出向いてまで？それが「日帝」（日本帝国主義）ということ。わずかな救いは、施設を出て、降りそそぐ陽光のもとにひろがる優美な庭園で、そこでは日曜の午後を過ごす、穏やかな家族連れや恋人たちが見られました。

また、私たちに大きな感謝となったのは、彼らも初めての入館という、ガイド・運転手・通訳を務めてくださった大学側の方々、また礼拝で一緒だった、YWCAの重職をしておられたという、日本語の達者な婦人も、私たちとともに中を歩いて見てくださったことです。胸のドキドキする激しい衝撃が、これらの方々の労わりによって、大きく慰められ、立ち直らされました。ありがとうございました。

2月9日（月曜日、滞在第3日）

この日の夕方から、いよいよシンポジウムが始まります。これまでは、土・日だったので、大学食堂がなく、いつも食事は外に案内していただきましたが、今日の朝食からは、すべて学内で済まされます。午前の自由時間には、景福宮とそこにある国立民俗博物館に連れて行っていただきました。ここではまた、韓国の歴史の豊かさを偲ばせるものに出会いました。

16時になると、ソウル側の会員方も勢ぞろいして、65人、充実した数時間となりました。もう10年も前から、日本からは講師として1人、2人の方が参加することは続いていたのですが、14人もグループで参加するのは、今回が初めてなのです。でも、会は格式

ばった調子や、故意の友好ムードを演出するのでもなく、とても自然に、また気さくな感じで、初の出会いの場がひろげられてゆきました。

中でも、今日の自由時間まで、こまめに世話をしに現われてくださり、にこにここと楽しげな温顔で私たちに接してくださった、韓国側会長の柳錫成（ユ・スクスン）教授（ソウル神学大学大学院長）が、いちばん鋭く突き刺さる内容を、熱情こめて話されたのが、なんといっても印象的でした。鈴木正三（日本ボンヘッファー研究会）会長の10年来の親友とのことで、韓国人の明かるく、愛らしく、柔軟でしかも強靱な、よい面ばかりを体現しているよ

うな方です。

今回のテーマは、「東アジアの平和とボンヘッファー」で、基調講演、発題、討論、すべて現在の差し迫った世界情勢の中であるだけに、どの発言者も、真摯な内容の披瀝となりました。

私はかねがね、国際的な交流の場で、遠くからせっかく参加した日本人が、一つにかたまって、押し黙り、何の反応も示さずに、もっそりと挨拶もせず消えてゆく、そういう無意味な慣例を見ていましたので、講師級の人でなく、一般の参加者が、どれほど拙くても、何らかの手がかりとなる言葉を残すよう、心掛けるべきだと思い、次のようなことを述べました。

「今しきりと、軍事的な安全保障ということが言われ、政治家など、軍事力がなければ発言力がない、強力な軍事同盟に加わらなければ将来はない、というような意見に支配されています。それ以外は、ただの理想論に過ぎないと嘲ります。

「私は、まだ2,3日ですが、こちらに来て、ここに平和的に生きる人々が歴史を作ってきたのだ、とつくづく感じさせられました。石像の動物などでも、丸っこくやさしく、少しもいかついところのない、穏やかな表情をしており、そういう文化なのだ気づきました。そこに外から、ときどき侵入がなされる。日本など、わざわざ海を渡って襲ってくる。ここが平和な国だったからでしょうか。

「今イスラエルも、アメリカも、ただ平和に生きる国の人々の上を、傍若無人に襲い、それを他の国々は、あきれて見ている。私たちは、この会で非暴力による平和ということを学んでいますが、軍事による集団安全保障ではなく、それに打ち勝つような、言論による集団安全保障が、もっともっと強力に展開されるべきではないでしょうか。暴力を、正義の言葉の力によって、世界中の人民がとり囲み、個々の平和な国を孤立させないようにする。信仰の力を、底辺の人々がもっともっと発揮してゆくべきだと考えました。」

夕食時、こちらからのお土産として、いく種類かのうち、私の作成した、ボンヘッファー「獄中書簡」中の音楽のCDと、「バッハ・カンタータ 50 曲選」CD 第1期4巻も、プレゼントしました。みなさん、歓声をあげて喜ばれました。前日に、柳教授と話し合った、将来この大学のホール（3000名収容、9月にパイプオルガンが設置される）での演奏、という夢も披露され、他の大学の学長さんその他からも申し入れや希望などが続いて、にわかに関心味を帯びてくるようでした。

もうとっさに、私の頭には、プログラムが浮かんでいます。1) モテット BWV228 〈恐るな われ なれと共にあり〉、2) カンタータ BWV6 〈とどまれ我らと〉、3) カンタータ BWV78 〈イエス わが心を救い出したまいぬ〉、4) モテット BWV225 〈主に向かいて歌え 新たな歌を〉。この4曲なら、猛練習すれば、いつでも応じることができるでしょう。ぜひコンタクトを続けたいと思いはじめました。

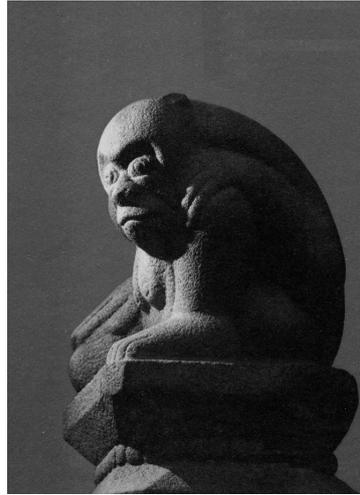
2月10日（火曜日、滞在 第4日）

午前には、研究発表と総合討論、両ボンヘッファー学会交流の時間があり、昼食をはさんで閉会礼拝をして、大きな感銘とともに会は無事終了しました。両国の学会として、大会を将来どのような形で続けてゆくべきか、どのような頻度でか、という討議で、日本側から、いつの日か北のピョンヤンで、という目標を掲げてはという提案もあり、流動的な情勢下で困難はあるだろうが、この会が率先して南北の融和の勢いを推進させてゆくのは重要だ、と認められました。

その後、ほとんどの参加者がソウル市内のホテルに移動するので、荷物を積み込んで大学の車で出発。中途にある一つの地に案内していただきました。これも「西大門刑務所歴史館」（1998年開館）と同じように、ごく新しく開設された「華城市提岩里 3.1 運動殉国記念館」（水原）です。「華城の抗日独立運動の状況を広く知らせることにより、烈士達の愛国精神を称え、歴史教育の場として寄与する」ために建てられ、ガイドも14分間のビデオも、日本語でも聞くことができました。裏手の小高い丘の合葬墓で祈祷しました。このような史実を語る場所について、日本人が足跡を残しているものはとくに、日本のマスコミは絶え間なく伝えてほしい。私たちは、主催者の大学のご好意で、閉会后までもこうして貴重な訪問をゆるしていただけたのです。参加者一同、これはただ1度の訪問ではすまない、できれば何度も、という思いを強くしたのです。

ソウル市内での、6人の大学関係の皆様をお招きしての夕食をもって、今回のスケジュールはすべて終わりましたが、さらに1人の大学職員の方が、明日の私たちの案内役を、積極的に申し出てくださるといふほど、徹底したおもてなしぶりです。

2001年のワールドカップ共催以来、急激にわだかまりの溶解した両国の交流は、その勢いを駆って、北の



●猿の石像も、丸っこくやさしく…

解放まで、ますます協働を続けてゆかなければ、と思います。半島分断の禍根をつくった日本は、周辺国の

情勢待ちをいつまでも続けずに、みずから汗を流してその牽引力となる責任を持っているのです。政府非難・マスコミ批判、教育不在などをぐちるだけに留まらず、持続した意志と行動に乗り出すときだと、強く心に期しました。

（帰宅直後に読んだ新聞のなかで、「人間安全保障—ムンバイが教えた日本の道」という武者小路公秀氏の記事（朝日新聞2月12日朝刊）が、私の発言に近い内容を紹介しておられることを知りました。）

提案：帰りの機内では、なるべく離れて座席を取りませんか。

何のためかと言いますと、初来日の外国人の着陸直後の交通アクセスを手助けするためです。私も、一人旅で出迎えのない場合には、困ったことが何度もありました。ですから、いつも機内などで長時間乗り合わせる外国人とは、なるべく話を交わすようにしています。

今回も（団体の中でも、間をおいて搭乗手続きをすれば、席は離れて取れます）、ソウル在住の若いビジネスマン2人と隣り合い、新宿センチュリーハイアットでのセミナーに出席とのこと。空港に着くと、そのホテル直行のバスは1時間も待つことになるので、数分後にすぐ出発する新宿駅止まりのに急いで同行し、私はそこからタクシーで帰宅するので、ホテルに立ち寄って、そこで別れました。

私も一人旅ではいつも機内、車内で外国人の友人ができたし、帰国時は隣席の外国人に道案内をして別れるようにしています。東京は、日本人でも交通アクセスの難しい大都市なのに、初めての人が、どれほど不安な気持ちで第1夜を過ごすことでしょう。第1日の経験で、その国の印象は残るものです。それで成田に

降りる日本人が、なるべく多くの外国人のたよりになれるよう、団体であってもばらばらに座席を取ることを、私は希望するのです。そのほうが、また機内の数時間を、外国人と知り合う好機として有効に生かせることにもなるでしょう。 (了)

シャコンヌとパッサカーリア

片岡武彦 (団員：バス)

■現在練習中のカンタータ第78番「イエス わが心を」の冒頭合唱曲が<パッサカーリア>形式に基づいているのに因んで、それと類似した形式である<シャコンヌ>との関係を、片岡さんが調べてくださいました。

手元にある音楽辞典は“The Oxford Companion to Music”といって、Dr. Percy A. Scholes という1958年に亡くなったイギリスの学者が6年間を費やして書き上げた、読みごたえのある「聖書より少し長い」(1200ページ)一冊の本で、1970年に出版された第10版です(初版は1938年)その中から“Chaconne and Passacaglia”の部分を翻訳してみました。

☆ ☆ ☆

この二つの音楽様式は実際的には分別できなくなったので、ここでも両者を同時に扱うことにする。どちらもダンスから発生したもので、シャコンヌはスペインの(そのスペインでは、南米に起源があると考えられていた)、そしてパッサカーリアはスペインまたはイタリアのダンスから生まれたように思われる。共にゆっくりした3拍子の踊りで、基礎低音(Ground Bass)の上に構築されているという特徴を共有している。

パッサカーリアは、最近では18世紀初頭までフランスで踊られていた。そして二つの踊りのリズムと形が存在していたが、器楽曲として音楽に取り入れられるようになって、作曲者たちはこの二つの名前を区別無く当てはめるようになった。ほとんどすべての音楽辞典でこの二つは別々に扱われているが、どこで二つを区別するかについては、同じ答えを見つけることは困難である。また、シャコンヌ、パッサカーリアといわれる楽曲を調べてみても、はっきりした区別はいくつかの例においてのみ確認できるだけである。

時にはこの二つの名前が同じ曲に用いられていることがある。例を挙げれば、グルックのオペラ「パリスとヘレネ」の中の“シャコンヌ”は「アウリスのイフィゲーニア」の中では“パッサカーリア”の名前で現れている。

(シャコンヌまたはパッサカーリアと呼ばれる)個々の楽曲はそれぞれかなり異なっている。たとえば、ある曲では基礎低音が上のパートのあちこちに飛んでいたり、そして、この傾向はシャコンヌよりもパッサカーリアに多く見受けられるのであるが、しかし、いずれにしても、作曲者はこの二つの名前を規則的には用

いておらず、基礎低音に基づいて作られた器楽曲はパッサカーリアともシャコンヌとも呼ぶことができると思われる。また、基礎低音に基づいていなくても、同様の短いセクションに基づいた曲も同じように呼んでいいだろう。低音にそれがあるか無いかにかかわらず、4ないし8小節の短い(基本または変奏の)セクションに区切ることができるのが、この様式のきわだった特徴のひとつと言えるだろう。

基礎低音に基づいた精巧な3拍子の楽曲と言う意味では、17世紀および18世紀初頭の作曲家たちは鍵盤楽器の作曲にこの様式を多く用いた。フレスコバルディー、ブクステフーデ(シャコンヌ様式のカンタータも書いた)、クープラン、ヘンデル、バッハなどがそうである。

リュリとラモーはオペラの最後にこの様式をたびたび用いたし、17世紀後半から18世紀前半の作曲家たちも同じ手を用いた。さらに後から来るグルックも、「アルチェステ」「アウリスのイフィゲーニア」同様「オルフェウス」(1762)の最後をすばらしい“シャコンヌ”で飾っている。これらのオペラのフィナーレを飾るシャコンヌは、必ずしも基礎低音に基づいてはなくて、はじめに出てくる主題の繰り返しによる短い楽句のつながりからなっている。フランスではこの短い楽句のことを“couplets”と呼び、リュリの曲にいたっては60ないし70もの4小節からなる“couplets”を見ることができる。

イギリスの音楽にはシャコンヌもパッサカーリアもほとんど出てこないが、“ground”とか“divisions”とか呼ばれるものが同じようなものである。

まれに2拍子のシャコンヌがあり、クープランのハーブシコード曲のなかや、パーセルの“ground”のなかに見つけることができる。

「シャコンヌ」という題のつくもっとも有名な例としては、バッハの「無伴奏ヴァイオリンパルティータ第2番」BWV1004の最終楽章をあげることができる。同じく「パッサカーリア」の例としては、最高のオルガン曲といわれるバッハの「パッサカーリアとフーガ」BWV582をあげることができる。あのすばらしい「ゴールドベルグ変奏曲」BWV988にはどちらの題もついていないが同種のものといえる。ベートーヴェンの「ピアノのための32の変奏曲ハ短調」とブラームスの「交響曲第4番」のフィナーレは同じ様式の近代における例といえるだろう。こうして見てくると、今までに作られた大曲のいくつかはシャコンヌ・パッサカーリア式変奏様式に基づいてつくられていたことがわかる。

イタリア語の“Ciaccona”あるいはフランス語の“Passecaille”の表記も見られる。ドイツ語の“Hahmentrapp”または“Gassenhauer”がそれぞれにあたるという説は、二つの異なった信頼の置けない語源からの翻訳によると思われる。たまに英語には

“Passingala” の表記もある。

☆ ☆ ☆

上の本ほどは面白くない “Collins Encyclopedia of Music” (1976 年の改訂版) では、それぞれが別個に扱われているが、内容は同じようなものでした。